初めての早びき

昭和六十一年度　四年　女児

わたしは、この前かぜをひきました。かぜというと、ぎくっとはきませんが、ばかにしてはいけないことを、わたしは、はっきり覚えました。

ある朝、起きたらのどに何かささったようなかんじでいたかったので、お母さんに言いました。お母さんは、学校を休むかとか、薬を飲むかとか聞くので、二種類の薬を飲んで学校へ行きました。学校へ向いながらも早くつくえにねそべりたいとばかり思って、それ以外の事は何も考えられませんでした。やっと着いて、つくえにねそべっていると、みんなが集まってきて、あれこれ理由を聞いてくれたのですが、答えたくありませんでした。

算数の時、三ケタの教字が四ケタに見えたので、もうもたないと思い、保健室に行きました。保健室に行くなんてわたしは初めての事です。何だかどきどきして、いやな感じでした。足のすりきずなどでは、何度も行った事はありますが、保健室のべっドは初めてだからです。

奥村先生はいなかったので、一人でねていました。

何分ねたでしょう。ろう下のうるさい音が頭にひびいて目を覚ましました。中間休みになったようでした。わたしもろう下を走ったことがありますが、わたしのようにねていた人に、こんなにめいわくをかけたんだなあとわかりました。

でも、この中間休みにうれしい事もありました。クラスの女の子みんなが手をふったり、サインをしてくれたのです。それに千春さんと典子さんが中に入って来て具合を聞いてくれたりしてくれました。うれしくて元気が出てきました。でも、熱を計ったら八度四分もありました。「これじゃあ、奥村先生が来たら、多分帰されてしまうだろうなあ。」と思いました。本当はわたしは帰りたくなかったのです。早びきなんて絶対いやでした。せっかく典子さんと千春さんが、また来てくれると言ったのに、来ないうちに帰るなんていやだったのです。

しばらすると、奥村先生が三年生の女の子を連れて保健室に入って来ました。

「あれ、だれかいるの。」と言いました。わたしは、帰りたくなかったので、わざと大きい声で、

「はい。」と返事をしました。

「熱は、計った。」と聞かれたので、またさっきと同じよ

うに なるべく大きな声で返事をしました。すると、
「何度。」と聞かれました。その時、わたしはちょっと考えこみました。八度四分と言ったら家に帰されると思ったのです。わたしは、とっさに、
「七度四分。」と答えてしまいました。
「そう、熱はあるのね。」と、先生は言って、今きた三年の子の体温を計りました。
「五分たったら、自分で見て教えなさいね。」と先生が言いました。その子は小さい声で弱く返事をしました。体の具合がよほど悪いのだなあと思いました。すると急に、
「青塚さんも、熱計りなさい。」と言いました。わたしは、
「しまった、ばれてしまう。」と思いながら、仕方なく体温計をうでにはさみました。三年の女の子の体温が計り終わると、今度はわたしの番でした。体温計を見て、わたしはびっくりしました。八度七分もあったのです。先生は体温計を見ると、
「大変な熱だ。これだば帰ってもらわねばね。」と言いました。わたしは、体がじょうぶな方なので、七度ぐらいならふつうと同じようにいられるけど、さすがのわたしも起きると地面がゆれて見えました。
　となりでねていた三年生も早びきするらしく、お母さんが会社からわざわざむかえに来たようでした。わたしの場合は お母さんもおばあちゃんもおじいちゃんも家にいるので幸せなんだなあと思いました。
　その日は、具合が悪くて大変でしたが、友達のありがたさや、家族が家にいるという幸せを感じた一日でした。